



Title	「の(だ)」の機能：名詞文との共通性を中心に
Author(s)	野田, 春美
Citation	大阪大学, 1994, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39092
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	野 田 春 美
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 1 5 9 8 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 6 年 1 2 月 5 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条 第1項該当 文学研究科 日本学専攻
学 位 論 文 名	「の (だ)」の機能—名詞文との共通性を中心に—
論 文 審 査 委 員	(主査) 助教授 仁田 義雄 (副査) 教 授 宮島 達夫 教 授 真田 信治

論 文 内 容 の 要 旨

本論文において考察の対象としたのは、日本語の文の文末や節末に現われる「の (だ)」「(んだ)」「のです」「んです」「のである」「の」の代表形とする)である。「の (だ)」に関しては、今日にいたるまで、非常に多くの研究が行なわれてきている。多くの研究者の関心を引く理由としては、まず、「の (だ)」の問題が、単なるある形式の意味や機能がどうであるかという問題に止どまらず、他のさまざまな言語形式に関する問題、文の性質や種類をどう整理するかという問題、談話分析における問題などと深く関わってくるということが挙げられよう。その他の理由としては、「の (だ)」は会話などに極めて頻繁に使用されること、「の」自体が実質的な意味を持たないため正体がつかまえないこと、基本的な性質を指摘するだけでは十分説明できないほどの意味・機能の広がりを持つこと、したがって日本語を母語としない学習者にとっても習得の困難な形式であること、なども挙げられる。以上のような理由で、「の (だ)」に関する先行研究は多いが、未だ、その全貌が明らかになったとはいいがたい。そこで、本論文は、「の (だ)」の機能をより包括的に考察し、その全体像をつかむことを目的とする。

議論を進める上で基本となるのは、「の (だ)」が文を名詞文に準ずる形に変えるものであるということである。「の (だ)」は、準体機能をもつ「の」によって、その前の部分を名詞句化し、それに「だ」を付加した形である。したがって、名詞文と同じような形をしているのだが、今や「のだ」の形で一語化しているため、名詞文とは異なる性質も持っている。そこで、本論文では、「の (だ)」の文が名詞文と共通性を持つということを重視し、かつ、名詞文とは異なる点があることにも注意を向けながら、考察を進めた。以下、本文の順序にそって、各章の内容の要約を示す。

まず、第一章では、考察の対象の範囲を明らかにした後、数多い先行研究の中から本論文にとくに関わりの深いものを中心に紹介し、それらの問題点を指摘した。先行研究を踏まえた上で、本論文の取った立場は、「の (だ)」を大きく、スコープの「の (だ)」とムードの「のだ」に二分し、相互の異同を探ることによって「の (だ)」全体を捉えるという立場である。二分するといっても全くの別物と考えるわけではなく、両者は連続的なものとする。しかし、「の (だ)」の意味・機能には広がりがあるので、それらをできるだけ明確に整理するために、まず、この二つに分けて考察を進めた。

第二章では、スコープの「の（だ）」について考察した。スコープの「の（だ）」は、[準体助詞の「の」+「だ」]という組成のままに近いものであり、構文的な必要によって用いられる。具体的には、事態の成立以外の部分を否定などのフォーカスにするときに、スコープの「の（だ）」が必要となる。

たとえば、「(話し手が)泣いている」という事態の成立は認めながら、その理由が「悲しくて」であることを否定するには、スコープの「の（だ）」を用いて、「悲しくて泣いているんじゃない。」といった形にしなければならない。スコープの「の（だ）」を用いずに、「?? 悲しくて泣いていない。」といった文にすると、泣いているという事態の成立が否定されてしまい、不自然である。このようなスコープの「の（だ）」の文の持つ対比性や、文の一部をフォーカスするという性質は、名詞文と類似していることを指摘した。

また、スコープの「の（だ）」のスコープとなった部分のうち、どの要素がフォーカスとなるかを決定する主な要因は、その要素の階層構造上の性質であること、副次的な要因としてプロミネンスが関わっていることも指摘した。

次に、第三章ではムードの「のだ」について考察した。ムードの「のだ」は、スコープの「の（だ）」のように、「の」+「だ」としては考えにくく、「の」と「だ」が全く一語化して、話し手の心的態度を表すという新たな機能になっているものと考えられる。したがって、スコープの「の（だ）」と違って、名詞にも自然に接続するし、主題の「は」を自然に含むこともできる。

また、ムードの「のだ」は、さらに二分できることを指摘した。話し手が、自分の認識していなかった事態を把握したことを示す対事的な「のだ」と、話し手が、相手の認識していなかった事態を提示する対人的な「のだ」である。たとえば、「山田さんが来ないなあ。きっと用事があるんだ。」という場合の「のだ」や、「そうか、このスイッチを押すんだ。」という場合の「のだ」は、対事的な「のだ」であり、「明日は来ないよ。用事があるんだ。」という場合や「スイッチを押すんだ。」と命令するような場合の「のだ」は、対人的な「のだ」である。

そして、対事的な「のだ」にも対人的な「のだ」にも、状況や先行文脈に関係づけて事情や意味を示す「関係づけ」の場合と、状況などと関係づけずに既定の事態を示す「非関係づけ」の場合があることを述べた。先の例のうち、「山田さんが来ないなあ。きっと用事があるんだ。」という場合や「明日は来ないよ。用事があるんだ。」という場合の「のだ」は「関係づけ」を示すものであり、「そうか、このスイッチを押すんだ。」という場合や「スイッチを押すんだ。」と命令する場合の「のだ」は「非関係づけ」である。さらに、関係づけの「のだ」の文も非関係づけの「のだ」の文も名詞文との類似性があることを指摘した。

以上、論文の前半では、スコープの「の（だ）」とムードの「のだ」の基本的な性質を考察したが、「の（だ）」の機能を正確に捉えるためには肯定の平叙文だけを対象にしては不十分だと考え、論文の後半では、さまざまな文に現われる「の（だ）」について考察を進めた。

まず、第四章では、否定文や質問文に現われる「の（だ）」について考察した。「ないのだ」には、スコープの「の（だ）」もムードの「のだ」も現われるが、「のではない」には、原則としてスコープの「の（だ）」しか現われない。たとえば、「悲しくて泣いているんじゃない。嬉しくて泣いてるんだ。」といった場合の「のではない」は、「悲しくて」を否定のフォーカスにするために用いられたスコープの「の（だ）」として自然である。しかし、ムードの「のだ」を「のではない」という形で用いようとする、「?? 明日は来ないよ。用事があるんじゃない。」というように不自然になる。

さらに、「～は～ない」といった形の否定とも比較しながら、「のではない」という形の否定が対立する事態の成立を必ず含意すること、その性質が名詞文の否定と類似していることを考察した。

質問文にも、スコープの「の（だ）」とムードの「のだ」が現われる。事態の成立以外の部分をフォーカスにする場合には、スコープの「の（だ）」が用いられるのが自然である。たとえば、「私に聞いているんですか？」といった文では、スコープの「の（だ）」が用いられることによって、「私に」を質問のフォーカスとすることができ、「私に聞いていますか？」といった文では、「私に」を質問のフォーカスにするのは不自然である。ムードの「のだ」は、状況や先行文脈の事情を問うときなどに用いられる。たとえば、相手がコートを着たのを見て、その状況の事情を問うときには、「帰るんですか？」というようにムードの「のだ」を用いた質問文が自然であり、「?? 帰りますか？」といった文では不自然である。

さらに、応答文におけるスコープの「の（だ）」、ムードの「のだ」の現われ方についても考察を加えた。

次に、第五章では、複文において接続助詞が接続して用いられる場合について考察を加えた。スコープの「の（だ）」に接続助詞が接続したものとしては、「のではなく」「ので」（「のであり」「のであって」）「のなら」「のだったら」「のであれば」「のでは」を取り上げた。いずれも、名詞に接続しにくいこと、主題の「は」を含みにくいことなどからスコープの「の（だ）」と考えられる。したがって、名詞に接続助詞が接続したものと共通した性質を持つ。

ムードの「のだ」に接続助詞が接続したものとしては、「のだが」と「のだから」を取り上げた。どちらも名詞にも自然に接続し、主題の「は」を含むこともできる。

前置きの「のだが」における「のだ」は、文末における関係づけの対人的「のだ」にかなり近いものである。一方、「のだから」に関しては、文末のムードの「のだ」の性質が独自の形で現われるため、詳しい考察を加えた。考察の結果、「医者私が言ってるんだから、間違いありません。」といった「のだから」の文において、話し手が、前件の事態を相手が知ってはいるはずだが十分認識していないものとみなし、それを十分認識させることによって、後件で示す判断に至らせようとする、という性質を持つこと、そして、その性質は文末のムードの「のだ」の性質とかけはなれたものではないことなどを指摘した。

最後に、第六章の前半では、スコープの「の（だ）」と準体助詞の「の」との異同や、ムードの「のだ」と「ことだ」「ものだ」「わけだ」などとの異同を考察することによって、「の（だ）」の機能をさらに明確にした。そして、第六章の後半では、「の（だ）」をスコープの「の（だ）」とムードの「のだ」とに二分する意義を確認した。スコープの「の（だ）」とムードの「のだ」の性質は、いずれも、「の（だ）」が名詞文に準じる形であることから生じたものである。したがって、両者に共通する性質も認められる。しかし、両者を二分することによって明らかになる現象があることを確認し、本論文のまとめとした。

論文審査の結果の要旨

本論文には幾つも評価すべき点が存在するが、それを、大きく、(1) 従来多くの研究者が取り組みながら、十分納得の行く解決を提出することのできなかった難問に対して、なるだけ十全な解決を提出すべく、新しい適切な分析・記述のための枠組みを導入し、その多角的かつ慎重な正当化に努めている、(2) 考慮に入れるべき多様な現れに対して、丹念に掘り下げたきめ細かい包括的な分析・記述を施している、といった二点を中心に述べていく。

まず、新しい適切な枠組みの導入、といった点から見ていく。「のだ」について、従来の諸研究（金田一春彦、林大、Alfonso、久野暉など）で提出されている「説明」といった用語だけでは説明できない現象が存することを指摘しながら、かつ、それに対して提案されているあまりに繁雑な分類に対しても批判の目を向け、なるだけ、シンプルでかつ包括性のある説明の枠組みとして、〈スコープの「のだ」〉と〈ムードの「のだ」〉といった二元論的方法を提案している。もっとも、従来の研究の中にも、「の」のスコープ拡大・形成の働きに注目したものや二種の「のだ」に留意したものもないではないが、「のだ」との関連づけや、二種の用法の異同・関係について十分考察されたものはなかった。二種に分けることを支持する現象の一つとして、ムードの「のだ」は、原則として肯定形であるのに対して、スコープの「のだ」には、肯定形（「のだ」）だけでなく、否定形（「のではない」）が現れる、といったことを指摘している。さらに、従属度の高い従属節末での「のだ」（「ので」「のなら」「のであれば」など）は、スコープの「のだ」でありムードの「のだ」でない、といったことを指摘している。これらは、統語的証左を提示し、自らが提出した枠組みの確からしさを確かめ論証しながら、論を展開するという本論文の堅実さを示している。枠組み提示における用意の周到さは、また、枠組みの質を保証している。この枠組みによる分析・記述は十分新しい現象を掘り起こしており、評価してよい。

分析・記述方法に関わる点としては、さらに、言語現象を忠実に分析・記述できる手法を採用している点が挙げられる。これは、具体的には、分類していきながら、似かよいを抽出した上で異なりを明るみに出すといった手法、典

型的なタイプだけでなく、中間に位置するものにも目を向ける、といった手法として現れている。こういう手法を用いてこそ、きめ細かい掘り下げた分析・記述が得られるのである。

また、分類基準が組織立っていることも、この一つに挙げてよい。たとえば、ムードの「のだ」を分類するにあたっては、事態が未認識か既認識か、状況や先行文脈との関係づけの有り無し、によって整然とした交差分類を行っている。

次に、現象を丹念に掘り下げ、きめ細かい包括的な分析・記述を施している、といったことについて述べておく。まず、収集事例の豊富さを論文末に挙げられた用例出典の多さから知ることができる。本論文のような連文・談話に深く関わる現象の場合、特に事例が重要になる。豊かな事例が存してこそ、自らの論点を証明し補強する確かな作例を提示することができるのである。

さらに、関連現象が極めて幅広く考察されている、といった点が指摘できる。「のだ」「んだ」「のです」「んです」「のである」「の」や「のだった」や「のではなく（て）」「ので」「のであり」「のであって」「のだったら」「のであれば」「のなら」「のでは」さらに「のだが」「のだから」など「の」を含む様々な形式について考察が施され、名詞文化との関係では「ことだ」が取り扱われる。

きめ細かい分析・記述の例として、例えば、「のだ」のない文や命令文と対応させながら、発見以前からの事態といった捉え方（「あっ、雨が降っている」対「あっ、雨が降っているんだ」）や既定事態としての再度の命令（「シュートしろ。シュートするんだ」対「??シュートするんだ。シュートしろ」）などの、非関係づけのムードの「のだ」の特性の指摘といったことが挙げられる。このような特性は、従来指摘されていなかったものである。また、ムード的な「のだ」については、従来の「説明」といった用語からも分かるように、対事的側面への注目がほとんどであった。それに対して、本論文では、「のだ」の意味・機能として〈対人的ムード〉といった側面の存在を指摘する。この指摘は、極めて興味深い。対人的ムードを対事的ムードから取り立てる根拠・特徴として、対人的ムードの「のだ」に前接する事態は話し手にとって既認識の事態である、といったことを指摘している。これも、注目してよい新しい指摘である。豊富に挙げられている例文が、既認識の事態を「のだ」が受ける場合、相手なしの発話になれないことを示している。さらに、既認識の事態を受ける「のだ」が「～と思う」の補文に極めてなりにくいことを明らかにしている。ここにも、統語的証左を用いて仮説を論証していく、といった基本姿勢を見て取ることができる。

言語事実のきめ細かい分析・記述の実例を二三挙げておく。ムードの「のだ」が原則として否定形を取らないことを指摘している。さらに原則の指摘だけでなく、否定命令（「騒ぐんじゃない」）や後悔（「こんな所に来るんじゃなかった」）では可能である、といった例外の存在をも指摘している。例外的現象の存在は、否定命令が「しないでくれ」だけでなく、「してくれるな」の形式を持っていることを考えれば、それなりに納得がいく。また、三上章が幾つかの理由から原因・理由を表す「ので」を「のだ」の一つの形としたのに対して、いわゆる原因・理由を表す「のだ」は別もので、本論文が取り扱っている「のだ」のテ形「ので」が存することを示している。さらに、フォーカスの置かれる成分についても、成分のタイプやプロミネンスとの関係から、かなり突っ込んだ論を展開している。

以上述べてきたように、本論文は幾つも行き届いた優れた分析・記述を提出しているが、論文の常として還漏や誤りがないわけではない。「のだ」そのものの意味・機能と構文的環境が課す意味・機能との峻別に不十分な箇所がないわけではない。形式そのものの意味・機能と構文的環境が付与する意味・機能とが常に截然と区別され切るとは限らないことを考えれば、上述のような本論文の問題点は、不可避的なことなのかもしれない。また、ムード的「のだ」の様々を記述していく中で、通例のムード研究では入らないようなものまでが、取り入れられている。これなどは、ムードの内包への規定づけに対する再考を促す契機になりうる可能性を否定できないにしても、やはり、ムードそのものを正面に据える研究から見れば、少し問題になるだろう。

しかし、上述したような点は、本論文全体の価値を損なうものではない。本論文は、「の（だ）」を含む文の分析・記述に新しい地平を切り開いたものであり、長い間にわたって研究者を悩まし関心を引き続けてきた「の（だ）」の問題への重要な一寄与をなしている。本論文審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位申請論文として、十分な価値を有するものと認定する。